

王畿の易學と丁賓

—— 大象義述を中心として ——

永 富 青 地

一、始めに

陽明學の、少なくともその初期に於て、著述を禁忌する傾向のあったことは傳習録に明證があり、また先學による指摘もある。王守仁(明陽)の思想の精髓は何といつても語録である傳習録に表わされているし、今回とりあげる王畿(龍溪)にしても、現在我々の見ることのできる全集の全二十卷、別卷一卷のうち八卷までが語録であることから判るように、質・量ともを中心となるのは語録である。従つて、彼らの思想の據り所であり、中心課題でもあった大學に對する注釋にしても、陽明・龍溪ともにごく短いものしか残していない。ところで王龍溪の著作として傳えられる書に『大象義述』がある。この書は、『易』の大象についてのみの著作ではあ

るが、ともかくも六十四卦のすべてにわたつており、整然とした體系をもっている。前述したような風潮にあつて、龍溪にこのような著作が残されたことには、いったいどのような意味があるのであろうか。小論は、從來殆んど取りあげられることのなかつた『大象義述』について、このような觀點から考察をこころみるものである。

二、『大象義述』成立上の諸問題

今日我々が目にすることのできる『大象義述』は『龍谿王先生全集』に附載の書が唯一のテキストであるので、まず全集の成立の事情について、四庫全書總目提要別集類存目四の記載に據りつつ、考察を加えていきたい。

是の集は其の子應斌・應吉の編む所爲り。凡て語録八

卷、書序雜著記說共に九卷、詩一卷、祭文誌狀表傳二卷なり。其の門人肅良榦之を刊す。丁賓又た重鐫を爲して益すに大象義述一卷、傳誌祭文一卷を以てす。

上文から知られるように、龍溪の全集は明代において二度編纂されている。ところが、第一回目に肅良榦によって刊行された全集に大象義述は含まれておらず、第二回目の丁賓による全集において始めて全集に別巻として加えられたのである。丁賓については後で詳しく述べるが、龍溪の晩年の弟子であり、九十三歳の長壽を保ち、太子太保にまで出世をした人物である。

一方、清初の『經義考』は大象義述について、
一卷、存。人物を考うるに、畿、字は汝中、山陰の人、
學者龍谿先生と稱す。嘉靖壬辰の進士、兵部主事を歴す。

と述べて「存」とはしているものの、その成立・内容については全く觸れていない。

この點は、現代の研究者にしても同様であつて、わずかに山下龍二氏が「王龍溪論」に於て、

丁賓本に附載されていることは前述の通りであり、全集本文中には言及した個所がないが、易を重視して屢々講

義していたことは明らかである。内容は易の大象の自由な解説である。

と述べておられる程度である。右の言及は貴重であるが、しかし、その成立・内容両面にわたっては、残された問題は多いとせねばならない。とくに全集の一回目の編纂が彼の死の直後であつたのに對し、二回目は萬曆四十三年と、三十年以上後であることも、その際考慮に入れるべきであらう。

いったい日本に於て從來これらの事が問題とされなかつたのは、和刻本との關係もあるらしく、すなわち、和刻本は、全て丁賓本を基にしているため、この問題が念頭にさえ登らなかつたと考えられるからである。因みに長澤規矩也氏の「和刻本漢籍文集第十六輯解題」によると、第一回全集の傳本は僅少であつたということで、従つて日本への流傳も少なかつたのであらう。

右の『經義考』の記述からも判るように、『大象義述』は本來單行されていたものと考えられるが、さて注釋類は全集に収録しないのが當時の慣例であつた。本書が第一回の全集に收められなかつたのはおそらく、こうした慣行によるものである。しかしそれならば何故に第二回の全集にこの著作が収録されるようになったのであらうか。むしろこの點こそが

問題となるはずであらう。

一方、二回目の全集に於て初めて収録されたことについては、丁賓による偽作、改作の可能性も無しとしない。そこで、本書は王龍溪のものと考えてさしつかえないかどうか、一應の検討を加えておくことが必要であらう。幸いに龍溪の『易』に關する論説として、全集卷八に「艮止精一之旨」がある。これは第一回の全集にも収録されているものである。そこで、次に『大象義述』の艮卦の部分と、これを對照させ、兩者を比較することによって、この點を明確にしておくをしたい。なお、兩者の共通部分を示す傍線は便宜上、「艮止精一之旨」に附した。

大象義述・艮卦

艮。止也。艮其背。止其所也。耳目口鼻四肢之發用皆在面。惟背爲不動。故以背取象。背難不動。而五臟皆係於背。九竅百骸之滋潤。背爲之輪。是以無用爲用也。目之視色。如視以背。則目不爲色所引。而視止於

王畿の易學と丁賓（永富）

艮止精一之旨

艮其背三字。是孔子提出千聖立命眞根子。艮。止也。艮其背。止其所也。耳目口鼻四體諸根之用。皆在于面。惟背爲不動。故以取象。目之于色。耳之于聲。鼻之于臭。口之于味。四體之于安逸。背自然之生理。

明矣。耳之聽聲。如聽以背。則耳不爲聲所引。而聽止於聰矣。陰陽和則交。謂之和應。不和則不交。謂之絕應。艮之上下。陰應於陰。陽應於陽。若相敵然。應而不和。是爲敵應。和應俗學也。絕應禪學也。不墮二見應而不留。忘已忘物。聖人之學也。視思明聽思聰。是爲不出位之思。非深於易者。其孰能知之。

故曰。性也。然有命焉。立命所以盡性也。目之視色。如以背視。則目不爲色所引。而視止于明矣。耳之聽聲。如以背聽。則耳不爲聲所引。而聽止于聰矣。所謂先立乎其大者。立命之符也。陰陽和則交。不和則不交。艮止上下。陰應於陰。陽應於陽。應而不和。若相敵然。故曰。上下敵應。不相與也。惟得其所止。是以不獲其身。不見其人。志已忘物而無咎也。天地之道。一感一應而已。和則交。謂之和應。不和則不交。謂之絕應。和應。凡夫俗學也。絕應。一乘禪學也。應而不與。不墮二見。謂之敵應。吾儒聖學也。背雖不動。五

臆背繫於背。九竅百骸之滋潤。背爲之輪。故曰。盡於背。是以無用爲用也。

この兩者を比較考察すれば、『大象義述』の該當部分と「艮止精一之旨」とが基本的に同一のものであることは明らかに知り得るであろう。語順などに於て若干の違いが見られるが、それは注釋である『大象義述』と艮卦のみについて述べた「艮止精一之旨」との性質の違いによるものと思われる。一例を挙げれば、『大象義述』がいきなり「艮。止也。」で始まるのに對し、「艮止精一之旨」では右の文はより後ろで現われている。これは、注釋書である『大象義述』の形式から生じた問題と思われる。

右の例から考えて、『大象義述』は龍溪自身の著作としてさしつかえないと思われる。また、大象義述のその他の部分についても、全集収録の際に増補または改變された可能性は完全には否定できないにせよ、右の推論をさまたげるほどのものとは思われない。

その理由の第一は、内在的なもの、つまり本書の内容と龍溪の他の著作に見られる思想との間に大きな相違が見られないことである。

例えば大象義述の最初の部分からでも、そのような語句を見付け出すのは、ごく容易なことである。

無欲は心の本體。⁽⁹⁾
一とは無欲なり。⁽¹⁰⁾

儒者虚寂を言うことを諱めども、夫子感發感應の理に於て、詳かに之を言えるは何ぞや、蓋し天下の感は皆な寂より生じて、其の應也、皆な虚に本く。⁽¹¹⁾

右に挙げた諸例は、ほとんど任意に取り挙げたものであるが、いずれも王學左派、なかならず龍溪の思想と近似點が多く、その間に差異を見出すことはできない。

理由の第二としては、より消極的なものではあるが、全集の編者である丁賓の性格を舉げることができる。

この人物については後述するとして、龍溪自身が大きな期待を寄せた晩年の高足であり、師説の熱心な信奉者であったことが現存する資料からも伺える。往々にして、そのような人物こそ師説に言寄せて自説を語ったりする譯であるが、丁賓に限ってはその可能性は低いと言いうる。それは彼が篤實な秀才型の人間であり、良くも悪しくも師説に改變など加えることはなかったと考えられるからである。また、そのような人物と周囲も見なしていたからこそ、全集の編纂の責任者

に推されたのである。⁽¹²⁾

以上の諸點から考えて、全集収録の際の増補または改變はもしあったとしても、それほど多くはないと考えられる。

しかし、それにしても當時の慣行からすればむしろ不自然な全集への収録を敢て行ったのは、丁賓の主體的な行爲である。第二回の全集に於て加えられた諸篇のうち、龍溪自身の作品は大象義述のみであることが、それをよく示している。

我々はここで丁賓自身の思想を考えてみなければならぬ。譯であるが、その前段階として、龍溪の易思想を見ておかなければならない。

三、王龍溪の易思想とその意味

我々はここで、山下氏のいう「易を重視して屢々講義していた」その内容を具體的に見ていきたい。

まず言えることは、彼が自己の、あるいは儒家の術語を説明する際、大いに易を利用した、ということである。たとえば、

易は君子の謀を爲す。復は其れ天地の心を見る。良知は造化の靈機、天地の心なり。復の六爻は皆比の義を發

王畿の易學と丁賓（永富）

す。⁽¹³⁾

とあって、良知を説明するのに復卦を用いており、また、

孟子の性善を道うや大易の善を繼ぎ性を成すとの言に本⁽¹⁴⁾く。

とあって、ここでは性善説の補強に易を用いている。

右に挙げた二例はきわめて斷片的な資料であったが、さらに正面から良知・性善の問題と易の関係について述べたものとして、次の文がある。

易は君子の謀を爲す。此れ乃ち學者に用功の的を揭示す。徒に造化を談説するのみに非ざるなり。故に曰く、天行健なり、君子以て自強して息まず、と。君子は此の四徳を行を元亨利貞と曰う。夫れ天地の靈氣結びて心と爲る。無欲は心の本體、即ち伏羲の所謂乾なり。剛健中正純粹精は天徳なり。欲有れば則ち以て天徳に達すること能わず。元亨利貞は文王之を演べて、以て乾の徳爲るや此の四者有るを贊す。加うる所有るには非ざるなり。元亨は發用を主どり、利貞は閉藏を主どる。故に曰く、元亨は始めて亨る者なり、利貞は性情なり、と。

天地の靈氣は獨り聖人のみ之有るに非ざるなり、人皆な之れ有り。今の人乍ちに孺子の井に入るを見て皆な怵惕

惻隱の心有り。乃ち其の最初無欲の一念、所謂元なり。念を轉ずれば則ち交を納れ譽を要め其の聲を惡みて然りと爲して欲に流る。元は始なり。亨通利遂貞正は皆な最初の一念に本きて天を統ぶるなり。復は夫れ天地の心を見る。意、必、固、我、一つも有れば即ち天地と相似ず。顔子此の最初の一念を失わず、遠からずして復す。纒かに動けば即ち覺る。纒かに覺れば即ち化す。故に曰く、顔子は其れ庶幾からんか、と。學の的なり。夫れ學に要機有り。功に頓漸有り。無欲を要と爲す。良知を致すは其の機なり。⁽¹⁵⁾

以上の例から、龍溪と易との關係は單に易を好んだ、というのではなく、彼の思想自體が易と深くかかわっていたことが明白になったと考えられる。

しかし一方で、彼の易解釋が、完全に自己の主觀によつて、易を理解しようとするものであったか、という疑問も當然豫想される。特に楊簡（慈湖）と比較されることの極めて多い龍溪であつてみれば、慈湖の『己易』との比較は興味ある問題である。

兩書の詳細な比較は小論の能くするところではない。しかし、一つ確かに言えることは、客觀的に見た場合、龍溪の易

理解が慈湖の徹底した唯心的解釋にいかにか近かうと、龍溪の主觀に於ては、兩者の易解釋には大きな差があつた、という事實である。

それは彼が劉邦采から「易蘊」を贈られた際における「興獅泉劉子問答」（全集卷四）での次の評語に表われている。

兄が易蘊は未だ必ずしも一一易に準ぜず。間々己が意を以て參錯發明す。其の間儘々格言有り。然れども尙未だ億説を離るること能わず。懷を虚しくして之を觀れば自ら見われん。⁽¹⁷⁾

つまり、龍溪は『己易』におけるような極端な唯心的解釋を容認してはいないのであり、逆に言えば少なくとも龍溪の主觀に於ては、彼自身の易解釋はそのようなものではないことになる。また、慈湖の思想を強烈に意識していた龍溪であつてみれば、むしろ右の評語は『己易』を意識した上のものであつた可能性も充分ある。

さて、それでは龍溪の易解釋の思想史的な意味はどこにあったかという点、それは陽明の良知學説を「易」を媒介として氣論と結合させたことになつたと考えられる。

もちろん、王陽明に於ても、良知を萬物の主宰とし、それを氣論と結びつけようとする試みはなされている。このこと

については、上田弘毅氏の「明代の哲學における氣—王守仁と左派王學—」に詳しい。しかし、陽明に於ては、良知・氣論と經書とを關係づけようとした痕跡は斷片的にしか見出せない。

龍溪は當然の如く、陽明の良知・氣論をうけ繼いでいる。そのありさまは上田氏前掲論文に詳しい。また龍溪自身も、全集卷十五の「易測授張叔學」に於て、

陽明先師、良知の旨を倡明してより、易道始めて明らかなり。

として、その連續性を強調している。しかし、實は龍溪は、良知・氣論を經書と結びつける點に於て、陽明にはない新しい特色を出している。それが右に述べた「易」を媒介として、良知學說を氣論と結合させたことである。そのことは次に掲げる全集卷八の「易與天地準一章大旨」に於て、最も明白に表われている。

天地の間は一氣のみ。易は日月の象、陰陽往來の體にして、隨時變易して、道其の中に存す。其の氣の靈、之を良知と謂う。

右に挙げた例から、彼の易思想が、陽明の良知學說を氣論と結合させる際の根據としての意味をもつものであったこと

王畿の易學と丁賓（永富）

が了解されるであろう。

四、丁賓について

次に第二回の全集の編者である丁賓について考えてみたい。その傳記的な記事としては、次に挙げる明史卷二二一の記事が、最も基本的なものである。

丁賓、字は禮原、嘉善の人なり。隆慶五年の進士。句容の知縣を授けらる。御史を徵授せらる。大學士張居正は、賓の座主なり。劉臺を誣るに賊を以てし、賓に屬して遼東に往きて之を按ぜしめんとす。賓力めて辭し、居正の意に忤いて官を去る。

萬曆十九年、薦を用つて故官に起げらるるも、復た憂を以て去る。南京大理丞に起げらる。南京右僉都御史兼督操江に累遷す。……賓南都に官たること三十年、早潦に遇う毎に、輒ち振貸を請い、時に家財を出して之を佐く。初め御史を以て家居す。丁憂にあたりて歸るに及び、三年に連なりて大いに饑え、威な資を捐てて以て振く。天啓五年に至り、復た粟三千石を捐てて貧民を振け、資三千金を以て下戸の賦を輸ること能わざる者に代わる。撫按して其の先後の事を録して上り、時に已に太

子小保に加えられ、詔して太子太保に進め、其の門を旌す。年高きを以て三たび存問せらる。崇禎六年卒す、年九十一。清惠と諡せらる。⁽²²⁾

右の引用から判るように、まさに堂々たる官歴である。しかも彼が官僚生活を送ったのが隆慶より崇禎に至る内外多事の折であったことを考え合わせるならば、彼が單に剛直なだけの人物でなく、優れたバランス感覚の持主であったことは確實である。また、彼は左派王學の信奉者としては、おそらく最も高い官位に登ったものと考えられるが、後述のように彼自身左派王學の信奉者であることを明言しているにもかかわらず、この傳記に於て全くそのことに觸れていないのは、むしろこの傳記が彼に好意的なものであるためだろう。

右のような事情もあり、彼が龍溪に入門した正確な年代は不明であるが、一應進士及第の隆慶五年前後と考えるならば、當時龍溪は已に七十代であったと思われる。

また注目すべきことには、單に丁賓が熱心な弟子であったというだけではなく、龍溪の方でも、この弱年の弟子に大きな期待を寄せていたのである。そのことは次に擧げる全集卷十五の「冊付丁賓收受後語」にはっきりと表われている。

禮原（丁賓の字）は資性敦茂、少年科を發す。即ち古道

に志有り、肯て俗套を以て自ら埋没せず、良知の説を聞くに及んで志益々自ら勵みて學を爲す所以の法を求む。⁽²³⁾

龍溪の文集・語録を通して、ここまで人を譽めることはめったにあることではなく、しかもその相手が彼とほとんど五十も違う丁賓であることを考え合わせるならば、丁賓にかけた龍溪の期待のほどがよく判るであらう。

丁賓自身の著作は『丁清惠公遺集』、全八巻に收められており、内閣文庫などに現存する。その前半は、いかにも高位の役人らしい大量の公文書の類であるが、後半部の目録を見れば、彼が左派王學に傾倒していたことは一目瞭然である。すなわち卷五には、「揭王文成公致良知說」「龍谿先師要語小引」があり、卷六には、「祭王文成公重修南都陽明祠成」「祭王龍谿先師」がある。

特に右の二つの祭文がいづれも、當時よくあったような義理で書いたという類のものではなく、非常に力のこもった力作であることからしても、彼が熱烈な陽明學徒であり、特に陽明龍溪の系統の思想を受け継いでいることを自認していたことは確實である。

そのことは前出「祭王文成公重修南都陽明祠成」に於て、ことさらに、「良知之是致」「知行之合一」という陽明學の

基本的な術語を擧げていることにも表われている。また、特に注目すべきことは、「祭王龍谿先師」に於て、

文成公良知の要を習坎重蹇（坎の象辭。蹇は險に通ずる。）

中に掲げて千聖の眞脈を紹承して以て後進の梯となりてより、唯だ我が先師のみ四無四有の祕旨を天泉に悟りて致良知の學益々以て不おほきく闡あ綱すす。

と述べ、陽明より龍溪への學の繼承を四無説を背景とした良知説によるものとはっきりとらえて、しかもそれを強烈に主張していることである。

また、目錄に於てもう一つ注目すべきことは、卷七・八の書牘からも判るように、彼が顧憲成・管東溟・袁了凡・耿定力・唐鶴徵・周海門など、實に種々な思想的立場の人々と交渉があったという事實である（特に管東溟・唐鶴徵への書簡が多いが、これは同年の進士合格者ということもあるであろう）。

それは前述のような彼のバランス感覚のよさを示すものでもあろうし、また現在ではほとんど完全に忘却されているこの人物が當時に於ては思想界に一定の地位を得ていたことを説明する材料ともなろう。さらに、彼自身の社會的地位からして當然ではあるが、右に擧げた以外に交渉のあった人物を見て、みな社會的に相當の地位にある人々ばかりであるこ

とも注意される。

以上から彼の思想的な立場が理解されると思うが、それは少なくとも彼の主觀に於て、大象義述の全集への収録は思想史的にみてどのような意味を持っていたのであろうか。以下、考察を加えてみたい。

當時、陽明の後學の間では、陽明の學説の眞意がどこにあるかをめぐって大論争が行なわれていた。その中心となったのがまさしく丁賓が陽明から龍溪への學の傳授のポイントとしている「四無四有の」説であり（無論、丁賓は四無説を支持している譯である）、それは結局の所、良知説をいかに理解するか、ということに歸着する。當時、良知説のみで六つもの異説があったといわれている。その混亂ぶりは島田虔次氏の「王龍溪先生談話錄並に解説」に詳しいが、とにかくそのような中にあるのは、自分の學説が陽明の正脈を繼いでいる、と主張することは不可缺であったと考えられる。まして龍溪に心酔し、それを公言もしている丁賓にとっては、陽明から龍溪への四無説による良知説の繼承という彼の主張の補強材料として、大象義述の全集への収録を行うことは、自分が陽明・龍溪の正當な後繼者であることの證明のためにも、極めて好都合だったのである。

その證據に、丁賓は遺集の卷五の「送冢宰沈公三載考績序」に於て、

某竊に惟うに、吾師龍谿先生嘗て陽明先生の楓潭子に答うる所の乾元用九の説を稱して曰く、用九は是れ和して倡えず、と。吾人の學問は切に爐を起し灶を作すを切に忌む、惟だ和して倡えざるを知る、故に能く時に乗じて天を御し、機に應じて動きて密に退藏するの旨を失わ^ず。⁽²⁵⁾

と述べている。このように丁賓は、常に陽明と龍溪の易解釋の共通性を最大限に強調しているし、また、そもそも大象義述に於て、前述のような經緯で、艮卦という未發の修養を重視する卦に關する學説が組み入れられていること自體が、四無説の傳授の補強材料として「易」を利用することに際して好都合であったといえよう。この點に於て、同じ王學左派でも、王艮（心齋）や羅汝芳（近溪）などが乾卦を重視しているのとは、著しい違いを成している。

しかし、丁賓が大象義述を全集に収録した理由としては、他にもう一つ、丁賓自身の社會的な地位と立場を考える必要があると思われる。

王龍溪は、心齋と並んで、當時における書院講學の最大の

推進者であつた。このことは全ての傳記作者が特筆大書する所であり、⁽²⁶⁾また彼の全集の（特に語録の）大部分はその間の記録である。その中に登場する人物の社會的地位が必ずしも高くないことから考えて、彼の講學の聽衆には多くの庶民層が含まれていたと考えられる。特に龍溪の思想が、直接泰州學派に分類されないにせよ、それに非常に近似したものであつたとされるだけに、なおさらである。

それに對して、太子太保の地位にまで登つた丁賓の場合、はるかに高い水準の知識人を念頭に置く必要があつた。このことは、前述のように、彼と書簡の往來のあつた人々が、思想的にも社會的にも一流の知識人ばかりであつたことから證明されよう。そのような人々を念頭に置く以上、王學左派であつても、どうしても經書を無視することはできなくなつてくる。特に彼の場合、書簡の相手には反王學左派とすべき人々が多かったのであるから、そうしなければ議論に説得性を持たせられなかつたと考えられる。

また一方で、時代の風潮も無視できない。實は、彼が進士に合格した隆慶年間以降は、それ以前に比べ、易經の注釋の數が激増するのである。『經義考』によれば、大雜把に言つて、丁賓が進士に合格してから明末までのわずかな期間に、

建國以來の二百年に匹敵する注釋が作られているほどである。

しかし、そのような傾向の典型的な一例として大象義述の全集への收録を考えようというのでは決してない。なぜなら、それら多數の注釋をより細かく見ていくなら、むしろ反左派の人々による注釋が増加しているからである。前出の『經義考』によって、それを分類していくと、江右王門・東林學案などに分類される人々のそれがむしろ多數を占めているのである。それらの著作の多くは、思想性よりも考證性に傾く、むしろ清朝考證學へと續く種類のものであった。

そのような時代の風潮の中で、陽明・龍溪の思想の正統性を主張し、しかも自分がその正脈を繼ぐと主張する丁賓に就いては、自分が中心となつて編纂される龍溪の全集に大象義述を加えることは、なんとしても必要なことだったのである。そして同時代の他の易經注釋と比較しての大象義述の特色の一つは艮卦の重視であることは前述の通りであるが、もう一つの、そして最大の特色とすべきことは、それが大象のみの注釋であったことであると考えられる。『易』全體の注釋を作つた場合、どうしても(同時代の右派の注釋の多くがそうであるように)、繫辭傳などに於て、朱子學的な考えに影響

されるのを免れ得ない。その點、大象のみならば、氣の持つ個別性を損うことなく、氣の哲學を表現しやすかつたと考えられるのである。独自の氣の哲學の完成者である王夫之(船山)にも、やはり『大象解』という著作のあることも、その旁證となり得ると思われる。

丁賓は、前述のような易經注釋の増大という潮流に乗りつつも、それを自己の學說を補強する際に都合のいい大象のみの注釋の全集への收録という形で巧みに利用することにより、左派王學者としての獨自性を保持し得たのである。

以上を要するに、大象義述全體は、王龍溪が陽明の良知學說を氣論と結合させようとした試みの産物であるにせよ、それを敢て全集に收録した丁賓の行爲は、明末の反左派・注釋重視へと向かう風潮と、左派の立場を、なんとか調和させようとしたものであり、それ自體、獨立した思想的營爲として考えるべきものを含んでいよう。

註

(1) 以下、特に必要の無い時は著作名に『』を附さない。

(2) 傳習錄卷上序。

(3) 佐野公治『四書學史の研究』三四九～五頁(創文社、一九八八)。

- (4) 卷一七七。是集爲其子應斌應吉所編。凡語錄八卷。書序雜著記說共九卷。詩一卷。祭文誌狀表傳二卷。其門人肅良駱刊之。丁賓又爲重鐫。而益以大象義述一卷。傳誌祭文一卷。
- (5) 卷五四。人物考。畿字汝中。山陰人。學者稱龍谿先生。嘉靖壬辰進士。歷兵部主事。
- (6) 『日本中國學會報』八、八六頁(一九五六)。
- (7) 山下氏前揭論文、八五頁。
- (8) 汲古書院、一九七八。
- (9) 無欲者。心之本體。
- (10) 一者。無欲也。
- (11) 儒者諱言虛寂。夫子於感發感應之理。詳言之。何也。蓋天下之感。皆生於寂。而其應也。皆本於虛。以上三者はいづれも乾卦の語。
- (12) この間の經緯については、全集の「重刻龍谿先生集紀事」に詳しい。
- (13) 全集卷二、建初山房會籍申約。易爲君子謀。復其見天地之心。良知者。造化之靈機。天地之心也。復之六爻。皆發此義。
- (14) 全集卷三、答中淮吳子問。孟子道性善。本於大易繼善成性之言。
- (15) 全集卷五、雞鳴山憑虛閣會語。易爲君子謀。此乃揭示學者。用功之的。非徒談說造化而已也。故曰。天行健。君子以自強不息。君子行此四德。曰元亨利貞。夫天地靈氣結而爲心。無欲者心之本體。即伏羲所謂乾也。剛健中正純粹精。天德也。有欲則不能以達天德。元亨利貞。文王演之。以贊乾之爲德。有此四者。非有所加也。元亨主發用。利貞主閉藏。故曰。元亨者。始而亨者也。利貞者。性情也。天地靈氣。非獨聖人有之。人皆有之。今人乍見孺子入井。皆有怵惕惻隱之心。乃其最初無欲一念。所謂元也。轉念則爲納交。要譽惡其聲而然。流於欲矣。元者。始也。亨通利遂貞正。皆本於最初一念。統天也。最初一念。即易之所謂復。復其見天地之心。意。必。固。我。有一焉。便與天地不相似。顏子不失此最初一念。不遠而復。纔動即覺。纔覺即化。故曰。顏子其庶幾乎。學之的也。夫學有要機。功有頓漸。無欲爲要。致良知其機也。
- (16) 山下氏前揭論文など。
- (17) 兄之易蘊。未必一一準易。間以己意參錯發明。其間儘有格言。然尙未能離億說、虛懷觀之自見。
- (18) 『氣の思想』所收、東京大學出版會、一九七八。
- (19) 自陽明先師。倡明良知之言。而易道始明。
- (20) 天地間。一氣而已。易者。日月之象。陰陽往來之體。隨時變易。道存其中矣。其氣之靈。謂之良知。
- (21) 丁賓。字禮原。嘉善人。隆慶五年進士。授句容知縣。徵授御史。大學士張居正。賓座主也。誣劉臺以賊。屬賓往遼東按

之。賓力辭。忤居正意去官。萬曆十九年用薦起故官。復以憂去。起南京大理丞。累遷南京右僉都御史兼督操江。……賓官南都三十年。每遇旱潦。輒請振貸。時出家財佐之。初以御史家居。及丁憂歸。連三年大饑。咸捐資以振。至天啓五年。復捐粟三千石振貧民。以資三千金代下戶之不能輸賦者。撫按錄上其先後事。時已加太子少保。詔進太子太保。旌其門。以年高。三被存問。崇禎六年卒。年九十一。謚清惠。

(22) 禮原資性敦茂。少年發科。即有志於古道。不肯以俗套自埋沒。及聞良知之說。志益自勵求所以爲學之方。

(23) 自文成公揭良知之要。于習坎重塞中。紹承千聖真脈。以梯後進。唯我先師。證悟四無四有之祕旨于天泉。而致良知之學。益以丕闡緬。

(24) 『東洋史研究』一一二一、一九五二。

(25) 某竊惟。吾師龍谿先生。嘗稱陽明先生所答楓潭子乾元用九之說曰。用九是和而不信。吾人學問。切忌起爐作灶。惟知和而不信。故能時乘御天。應機而動而不失退藏于密之旨。

(26) 『明儒學案』では、「先生林下四十餘年。無日不講學」(卷一一)としている。

* 王龍溪の全集からの引用は、内閣文庫所蔵の萬曆四七年刊本を底本とした。

(本稿は一九八八年十月九日の日本中國學會第四十回大會での口頭発表をもとにしている。)